

Global COE

ニューズレター
No.1

東京大学
The University of Tokyo



人文科学
死生学の展開と組織化

拠点探訪

人文科学
死生学の展開と組織化

拠点の目的

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の拠点探訪に伺いました。拠点リーダーの島菌進先生と、サブリーダーの下田正弘先生にお話をお聞きします。まず、こちらの拠点の目的をお教えてください。

島菌教授： 死生学という新しい学問領域を築いていくという目標を文学部として立て、5年前に21世紀COEの拠点がスタートしました。21世紀COEで構築した基礎を発展させて、もう一つ長期的な展開のための組織化まで行なうというのが目標です。

死をめぐる観念や実践あるいは儀礼といったものは、従来は伝統文化の中であまり意識せずに行なわれてきました。そういったものが時代の変化に伴って次第に生活から遊離し、死への向き合い方や人生の危機、またライフサイクルのさまざまな問題に新たな方法で向き合うことが現代人に求められています。それに対して応答していくということが課題だと思います。その中でもとりわけ医療現場が大きな場所になると思っています。

21世紀COEの間に大分基礎づくりが進み、新しい学問分野の輪郭、概要が見えてきました。そして何をしなければならぬかも明らかになってきました。また、それをどういうふうに通に教育に具体化していくかということも、かなり展望が明らかになってきましたので、今後はそれを一つ一つ形にし、持続的・永続的な教育研究組織に発展させていきたい。それがこの5年間の課題です。

世界的に見たときに、他にはこちらの拠点ほどのものはないと考えてよろしいのでしょうか。

島菌： そうですね。英語圏で死生学というのはデス・スタディーズとこれまで言われてきましたが、死のプロセス、死にゆく人の心のケア、あるいは心構えといったものをどのように援助していくか。また、死にゆく人を看取る人たちの、看取るための知識や自覚をどう育てるか。さらに死別の苦しみ・悲しみに悩む人たちをどうケアするかというようなこと。また埋葬や火葬という死後の葬り方、死体処理からその後の葬式などの儀礼プロセスにどういった現代的な問題があるかなど、死の前後に限定して死を考えることと考えられてきました。

しかし、そもそも死と生は一体のものであると考えられます。死まで生きる、あるいは死とともに生きることを自覚することによってよき生が与えられる、そういうふうに通に考えますと、非常に広い範囲の文化現象が死生という言葉でとらえられるわけです。それを総合的に研究するとなると、従来の英語圏のデス・スタディーズではとてもカバーし切れていません。しかも多くの場合、狭い西洋文化、キリスト教文化の枠内で考えられていましたので、我々としてはアジアの文化を踏まえ、比較の観点を基礎にしながら新たな死生の学問領域を開拓していきたいと考えています。このような観点はアジアだから出てきたわけであって、デス・スタディーズでは西洋のほうが先に進んでいたのですが、この拠点のような大きな展望を持った試みは世界的に先駆的なものだと思います。



島菌教授

Global COE ニュースレター No.1

人文科学
死生学の展開と組織化

Humanities
Development and Systematization of Death and Life Studies

文部科学省の事業「グローバルCOEプログラム」は2007年度にスタートしました。現在、東京大学には6拠点ありますが、2008年度以降も増えていく見込みです。グローバルCOEの各拠点の活動は、東京大学における教育研究活動の主なものの1つであり、これらの拠点の活動をニュースレターという形で順次ご紹介してまいります。

No1.のこの号では、人文科学分野の「死生学の展開と組織化」を取りあげます。

= Contents =

拠点探訪	1
Interview with Susumu Shimazono, project leader, and Masahiro Shimoda, sub leader (拠点探訪英訳)	9
グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の始まりにあたって(拠点リーダー 島菌 進)	17
死生学と人文学 (下田正弘)	19
死生学研究成果を社会に還元するーリカレント教育に向けて (清水哲郎)	20

2008年3月31日
東京大学COEプログラム推進室

人文社会系だけでなく、医学系の先生方も加わっておられますよね。

島菌： はい。文学部の哲学、倫理、宗教、インド哲学などが中心になっていますが、ほとんどあらゆる分野の人たちがこの企てに積極的にかかわっています。医学部の方はもちろん、教育学部、法学部等の先生方も協力する体制を築いており、理科と文科の接点という面もあります。東大全学としても専門分化の弊害を超えていく学術統合化の試みの一環として意義があるのではないのでしょうか。

下田教授： 小宮山総長が日本は課題先進国だという捉え方をされていますよね。この考え方は、国際的な比較の中で我々の死生学を捉える場合にも、意味があると思います。日本の現状に立って、諸学問の状況を照らし直してみると、医学、人文学、社会科学と縦横に発展をしています。日本という素地の上に多様な文化・文明を受け入れて、諸学が成り立っているわけです。その諸学が死生学という場に集うことによって、日本とともに新たに見えてくる課題がある。それが21世紀COEだったと思います。

生と死を一つのものとしてとらえていこうとすると、死生学がキーワードになっていくだろうと思います。日本が抱えている学問の現象と文化の現象、そしてそこに現れてくる生と死の問題をさまざまな学知がお互いに照らし合いながら、日本独自の新しい言葉やパースペクティブ（ものの見方）が生まれる。そして生活経験に根ざした実践知というものができて、それがさらに一つの理念にまで発展・昇華していくのではないのでしょうか。

死に関するある種の儀礼は時を経過するにつれて形骸化していき、実はもはや力を持っていないという状況です。ではどうやってそこを回復していくか。これは個別に発展しているそれぞれの学知の中にヒントがおさめられていると思います。その潜在的な知恵を触発し合えれば良いと思います。

諸学が死生学に加わってくることによって、逆に死生学が諸学に貢献できるというわけですね。

島菌： 死生学の一つの特徴として現場性、臨床性、実践性、あるいは市民や専門の現場で働く方たちのニーズを意識している面があります。医療現場、教育現場、あるいは法的問題や生命倫理など、現場で人々が悩んでいることにどう人文学が応答できるか。このような意識をもつことで、人文学が少し市民社会のほうへ近づいていって、古くからの人類の知恵の蓄積を再び生かすおすことにもつながると思っています。

人文学の若手研究者育成

21世紀COEで育った博士後期の院生やポスドクといった若手研究者は、どういうところに羽ばたいていきましたか。

島菌： 特任研究員の何人かが大学教員になりました。中には、アメリカの大学に就職した人もいます。もともと特任研究員は別の専攻を持っていて死生学という領域を新たにレパートリーに加えるというか、自分の専門を死生学という観点からさらに展開させた人たちです。新しい研究や教育の場で一層充実した活動ができているのではないだろうかと思っています。

人文学の場合、RA（リサーチアシスタント：博士後期課程の院生で経済的な支援を受けている者）より、PD（ポスト・ドクター：博士号を取得した若手研究者）への支援の方が大切だと聞きました。

島菌： 人文社会系では博士号を取っても、もう一つ研鑽を積まないと一人前の研究者・教育者にはなれません。これは国際

標準だと思います。ですから、その時期の人たちに博士後期の時の研究をさらに発展させる仕組みを提供することが文科系のCOEの大きな存在意義であり、我々のCOEではうまく機能していると思います。

また、グローバルCOEでは海外での研修や外国語での学術成果の発表の力を養えるようなプログラムを加えました。PDの育成ということがより重要な課題であり、それを我々がモデルとして示していると考えています。今後、COEだけでこういうものが満たされていくとは限りません。どういう形でPDの育成を日本の大学に定着させていけるのか、いろいろな実験的な試みを行なっているところです。そこではすべての人が幸運にも就職できるというわけではないともちろん推測できますが、やはり切磋琢磨が当然必要なわけで、オープンな形での他流試合の場になり得るでしょう。

東大以外の大学を卒業した人たちも、PDとして大勢来ていますよね。

島菌： いろいろな大学から分野を超えて来ています。博士課程のときには専門研究への集中が必要ですが、PDになるとさらに専門研究を踏まえた上での応用発展を目指した交流が大切になります。そういう面では若手の育成が今までと大きく違う形で展開しているといえましょう。それが死生学の場合はまずまずよい方向に、つまり本人たちにとってもよい刺激になるし、人文学全体の展開にとっても意義ある方向に踏み出せたと思います。

4つのレベルの教育

人材育成の具体的な計画についてお教えてください。

島菌： 4つのレベルに分けてお話ししましょう。第1は社会人に対するリカレント教育（再教育）を始めました。これは医療従事者、医療関係者が主な対象ですが、医療あるいは介護、ケアを専門とする人たちに臨床死生学を中心とした死生学的な考え方の教育を2泊3日ぐらいのコースで集中的に行ないます。これを何回か重ねるというやり方です。それには医学部の先生方の協力が大きな意味を持っています。

第2はPDレベルですが、21世紀COEの頃から続けてきました。これはグローバルCOEになってさらに規模を大きくして、繰り返しになりますが、特に外国での研修の機会を提供します。それから、論文の外国語での執筆のための訓練、援助を提供する。そういう新しい具体的内容を組み込んでPD教育を充実させています。

第3の大学院の修士・博士課程レベルでは、もちろん学生を財政支援することでPDと同じように学際的な研究に親しんでもらうのですが、将来的に副専攻化、さらには専攻化ということを考えています。例えば哲学を主専攻としながら死生学を副専攻としてとることができる、というようにひとまずしたいと考え、その準備を進めています。博士課程の場合は主専攻にまずは力点を置かなければいけません、死生学は今のところそれを補助する副次的な教育になります。その意味でもRAよりはPDの方に力が入っているわけですが、将来的には修士課程の段階でも死生学を副専攻にできるようにしたいです。それに先だって日本の人文系ではまだ主専攻・副専攻という制度が行き渡っていませんが、博士課程で新しく試みる可能性を探っています。

第4の学部の段階では応用倫理教育を2002年以来やってきました。これは死生学と密接な関係がありますが、応用倫理教育でやってきたものをさらに広げて死生学のほうにも展開していく。これは大学院レベルと学部レベル共通ですが、寄附講座で上級死生学講座が設けられ、死生学の専門家が教授と専任講師として加わりましたので、その2人の存在によってかなり質の高い授業が提供されるようになりました。

21世紀COEの時の大きな違いはどんなところですか。

島菌： 21世紀COEを進めたことによって寄附講座を獲得できましたので、その寄附講座の先生方が学部からPDレベルまでさまざまな教育を提供できるようになりましたし、研究分野としても臨床死生学の分野が非常に強くなったことですね。

PDレベルの教育ということでお話のあった外国での研修はどういう趣旨なのですか。

下田： ある種フィールドワークのようなもので、直接現地に行って現地の死生に関する学問状況に触れて経験してくる。直接コンタクトをとって会うことから人的、学的ネットワークが広がっていきます。それを教員レベルで提供するという事に限らず、若手のPDレベルで直接関係をつくってもらうチャンスにしようということです。我々教員が外国の先生を若手に紹介することもありますし、若手の方からこの先生に関心があるので行ってみたいと申し出てくることもあります。

島菌： 文学部は海外留学を奨励しており、これまでもあらゆるところに出かけて行っていますが、博士論文の段階だと行けるところが限られてきます。ある大学で博士号を取るということになれば、そこに少なくとも3～4年続けるということになりますよね。それはそれでいいのですが、研究テーマから、もっと広い経験を得たいと考えたとしても、そのための機会は博士号を取るまでにはなかなか得られないのが現状です。我々のCOEでそういう機会を提供したいと思っています。特に日本研究というようなことをやっている人は、なかなか大学院生時代には海外研修の機会が得にくい。また、海外の学会へ行くのも、理科系の場合は当たり前かもしれませんが、文科系の場合は長い論文を書かなければいけませんので、そういう機会を得にくいのです。そういうことを容易にしていこうと考えています。

だから海外に行くには大学に入って授業を受ける、図書館やフィールドで資料を集めてくる、それから海外の学会に出て報告や討議を聞いてきたり発表したりする、といったようにいろいろな形態を認めます。とにかく学問の幅を広げたいという若手のための支援をしようということです。

下田： 恐らく死生学というものの教育としての意義といいますが、位置づけの問題だろうと思うのです。今までの話がすべてそこに関連していると思います。先ほどRAとPDという話がありました。理科系の場合はRAの支援が必要ですが、我々人文系の場合はPDの支援が必要なのです。人文学の場合には人を育てていく、個人を育てていくことに大きな意味があるわけです。その個人がそれぞれの人文学の伝統をしっかりとして吸収して自ら思惟できるようになっていかなければなりません。そういう人間をいかに育てていくかということに海外留学のポイントがあるわけです。

そうしますと、プロジェクトを遂行するために人の集まりが必要になるということではないのですね。

下田： あくまで人をどう育てていくか、ことに人文学に立った人間をどう育てていくかということに重点がありますから、個々の支援が必要になります。博士論文を出してから研究者として自立していこうとする間に、その学問がどう持続され、さらに応用・発展されようとするかということにすぎ間ができます。そこをうまく支援するために死生学という新しい領域を今立ち上げているわけです。

人文学の目的は人間ですから、その人というものを主専攻によってずっと掘り下げてきました。しかし今度はもっとパース

ペクティブを広げて、自分がやってきたことを照らし直す必要がある。そのときに死生というテーマで再度見直してみると、それこそ医学、それに法律など異なった重要な課題が目に入りますので、自分がこれまでやってきたことが再度新しい視野に大きく巻き込まれて再編されていくわけです。我々はこれを、専門を鍛えていくためにも必要な教育だと思っています。それを与える場がこれまでではなかったわけです。



死生学研究会……定期的に行なわれる死生学研究会

広い適用性をもつ研究領域

理科系が主となる場でも人文系を専門とする人たちが求められるようになってきましたね。

島菌： PDの人の就職口として昔ながらのディシプリン、堅固な哲学とか宗教学とか社会学とか、そういうものはもちろん続いているわけですが、どんどんディシプリンの枠を超えるようなポストが増えていきますし、それは大学教員というポスト以外にも広がっています。例えば医療に関して生命倫理問題について助言をしたり、あるいは患者さんのケアについてチームをつくって活動するというようなことを、コメディカルと言ったりしますが、そういう人たちが増えています。それは必ずしも教育研究職だけではなく、違うところでも哲学等で博士号を取った人が必要とされる可能性があるということです。

しかし今はどういう展開になるかを見ているところで、どのぐらいのマーケットになるのか、つまり医療現場という自然科学の人、看護の人、せいぜい心理学の人が今までは重要だと思われてきましたが、さらにそれを超えて人文的な知識が必要となってくるのではないかと感じています。そこには文明史的な必然性があると思います。つまり従来は自然科学のみからアプローチしていたもの、あるいは生活文化の中で伝統的に培われていたものを人文社会系の学問によって補い、組み立て直していくような領域が広がっている。これは情報化とか健康に関わるサービス業の拡大、そしてかつては家族がまかっていたケアにかかわる職業の増大等、ある程度の経済発展を遂げた地域の新しい職業構造に対応する仕事、知識の開拓ではないかと思っています。

私は理科系の学問は会社みたいなもので、人文学は、ひよっとすると社会科学もそうかもしれませんが、個人商店だと思うのですが。

下田： わかりやすく言えばそうなんじゃないかと私は思いますが、島菌先生はどう理解されるか。ただ、その個人商店の個性が、あくまでテナントとして入った百貨店のなかで存在していること、つまり大きな学知のなかで存在していることは、意識されつづけてきたと思います。

大学院生は自分の博士論文のための研究をしなければなりません。理科系だとプロジェクトの一部と自分の博士論文が重なっていることが多いと思いますが、人文の場合はそうもいきませんよね。

島菌： それは我々のプロジェクトがどのぐらいの広い適用性を持っているか、さまざまな分野の人がそこに手を出してみても意義深いと感じるような分野・計画であるかどうかに関わってくると思います。死生学というのはまさにそういう領域です。文学を研究している人、歴史をやっている人、社会学をやっている人、宗教をやっている人、哲学をやっている人みんなが、



リカレント……医療関係者自身による事例検討



リカレント授与式……最終日には修了証が授与された

自分の研究分野から手を伸ばしてみたいと思える、発展性のある領域なのです。多くの国の人が自分が今までやってきたことの一層の発展を期待できる領域であり、そういう意味で矢野先生のたとえでいう社会的な性格をはらんだ領域だと思えます。

別の言い方をすると、研究員などへの応募がたくさんありますが、その中から我々のCOEに入って社会的な経験をしながら個人商店としてのさらなる発展を遂げるという展望を得られるであろう人を採用しています。

研究内容に関しては、21世紀COEのときからどのように発展させようとお考えでしょうか。

島菌： 21世紀COEの段階では、国際研究会議を活発に行なってきました。また、若手自身による研究会議もやってきました。それが特徴であり、誇るべきところでした。それをさらに発展させて、グローバルCOEではアジアでの研究交流に力点を置きます。

今年度は東アジアの死生学についての会議を中国で行ないます。中国、韓国、イスラム圏といった地域の研究者を招いたり、若手と教員の両方が先方の国へ行ったりして研究交流を行なうことを計画しています。

そういうときは英語を用いるのですか。

島菌： 韓国での2007年の会議は英語でしたが、2008年の中国の場合は中国語と日本語で行ないます。アジアにおいて英語でというのは、どちらにとっても母国語でない言葉を使うことになるので、本当の交流になかなかならないのです。ですからあらかじめ論文を翻訳しておいて、通訳しながら議論するという会議をすることがあります。そうしないと、アジアで行なう場合、例えば香港やシンガポールなど英語の得意な国の人が必然的に中心になって活躍してしまうことになります。日本人の中国研究者は中国語はよくできますし、中国人の日本文化研究者も日本語はよくできます。しかし、英語があまり得意でない日本人の日本文化研究者が中国人の中国文化研究者とやりとりするというような場合には、英語は非常に難しいのです。とりあえずは英語でやって、同時通訳を使うやり方と、前もって翻訳しておく方式をまぜながらやっています。仏教会は大体、日本語で済んでしまいませんか。

下田： いや、やはり現地語でやりますね。アジアでは現地語でやって、通訳を入れています。

実際の研究交流までにかなり時間を要しますね。

下田： 現地語でしっかり蓄積された内容を掘り出してくるという作業がどうしても必要で、英語という媒体のみでは掘り出す力が弱くてなかなかできないのです。

ですから人文学の場合には個別のフィールドにたいへんな労力がかかるわけです。東南アジアも多くの言語があって文化が分かれています。経済で考えるとしたら、東南アジアの経済の流れについて英語で捉えることができますが、文化とか文明という問題になると語学習得とその適用に本当にものすごい労力がかかって、ようやく確かなものを掘り出してこれるという状況になります。

島菌： それぞれの言語の専門家、さきほどの日本人の中国研究者とか、中国人の日本研究者とか、そういう人たちにかなり期待がかかるわけです。イスラム圏とやろうと思ったら、日本人でアラビア語がきちんとできる人に媒介となってもらってアラビア語のネイティブの人と話をします。アラブの中からまた日本文化の専門家を育てる。そういう非常に長い視野で考えないとできません。

自然科学のセミナーですと、国際標準語としての英語でないと成り立たないし、それ以外の言語は必要ないことが多いと思いますが、人文学の進展にはその5倍、10倍の労力がかかりますね。

下田： まず人文学をやろうとする人自体の比率が低いからです、その中からたいせつに育てていかなければなりません。ただ、1人育つとすごく強いわけです。相手の言語の中に入って、それこそ死生観というところまで分け入った人が育っていく

と、文化の断層を埋めるためには非常に強いです。

島菌： それぞれの言語で議論をするというところを確保しておかないと人文学の場合は深いところにいきません。ですから、言語が通じないもどかしさを覚悟しても現地語による発表を重視するのです。

でも、英語も使われるわけですよね。

島菌： イスラム圏に行ったら英語で話すことが多くなるし、インドでも恐らく同じです。ただ、中国、韓国の場合は漢字圏ということがあるので、その共通性が土台にあって、英語で行なうと、なぜ私たちは英語で話さなくてはいけないのかという不全感が残ります。ですから難しいですね。もちろん英語でもやりますが。



G-COE 研究室……グローバルCOE 研究室内の若手研究員たち

5年後の姿など

これからどのような成果を出されていくのでしょうか。また5年後の拠点はどのようになっているのでしょうか。

島菌： とりあえず死生学シリーズを東大出版会から刊行します。それは平成19年度ぐらいに第1次刊行が終わりますので、これらで死生学というものの輪郭が見えてくると思います。それから、COEを5年プラス5年の10年で進めているわけですが、これをもっと長期的かつ持続的な教育研究組織にしていきます。現在の講座を拡充し、従来の部局の枠に限定されないような教育研究組織の下地ができてくるはずですよ。

例えば医学部の学生と文学部の学生がともに死生学を学ぶというようなことになるかもしれません。

医学系の事業推進担当者はお二人でしたよね。

島菌： 15人のうち2人です。先ほどお話ししましたが、次世代人文学開発センターにできた上廣死生学講座の清水哲郎先生と山崎浩司先生が死生学の専門家として加わっています。清水先生は哲学をやってこられ、それをベースに死生学、ことに臨床死生学の研究を展開されてきた先生で、我々のCOEにとって理想的な方です。日本の死生学がまだよく見えなかった頃からそれにあたる学問を自ら立ち上げてきたからこそ、伝統的な人文学と死生学の両方が分かるというところに立っているわけです。

臨床死生学や臨床倫理学といった講義や演習を担当している他、ワークショップでコメンテーターを務めるなど、すでに我々のCOEの中で積極的に活動しておられます。2008年1月には「医療・介護従事者のための死生学」と題する3日間のセミナーを行ないますが、その中の臨床死生学に関する部分を担います。

他に何かこちらのCOEに特徴的なことがあればお願いします。

島菌： 文化資源学というのが今始まっています。これは少し前にCOEとは別に育ってきたものですが、一つの新しい企てであり、どのように人文学が時代に適応してくかという試みであり、COEが終わったときに問われることでもあると思います。社会人の再教育という面も含めて、文化資源学では、博物館のキュレーター（学芸員）などの育成に関わっています。研究教育職以外の職業生活に近いところに人文学が出ていく、という意味を持っています。このようなことも我々のCOEの前

提になっています。

下田： 秋山先生のジェロントロジー（老年学）寄付研究部門とも連携しています。また今後は生命科学研究ネットワークや学術統合化プロジェクトーヒトなど、学内のさまざまな研究教育組織と協力できる機会を増やしていきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

（インタビュアー： COEプログラム推進室長 矢野正晴）

Interview with Susumu Shimazono, project leader, and Masahiro Shimoda, sub leader

Humanities
Development and Systematization of Death and Life Studies

Project Objectives

I am visiting the Global COE base “Development and Systematization of Death and Life Studies” to interview Prof. Susumu Shimazono, project leader, and sub leader Prof. Masahiro Shimoda.
First of all, could you please explain the purpose of this base?

Professor Shimazono: Five years ago, the Faculty of Letters set a goal of building a new study field, Death and Life Studies, and to this end, established a 21st Century COE project base. The purpose of this Global COE base is to further develop the foundation that was built through the 21st Century COE project and prepare for the long-term expansion of Death and Life Studies.

In the past, concepts, practices and rituals surrounding death have been formed or conducted more or less unintentionally as part of traditional culture. As times change, however, these death-related affairs have become detached from everyday life and we are now required to address death, life crises and other problems associated with the life cycle in a different manner. Our theme is to respond to this new challenge. We expect that the field of healthcare, in particular, will assume greater importance in our activities.

The foundation built during the 21st Century COE project has provided us with a clear overview or outline of the new study field, showing what needs to be done in the future. This also gave us a clearer picture in the future in regard to how to incorporate what we found and achieved into our educational system. We intend to bring the vision to reality to develop a sustainable and lasting education and research organization. This is our goal for the coming five years.

Is this base the first of its kind in the world?

Shimazono: Yes, it is. In the English-speaking world, Death and Life Studies has been called Death Studies, which has centered on or been mostly limited to the following issues before and after death: how to support the dying process, mental care or preparations for dying; how to develop knowledge and awareness of care takers who attend people on their deathbeds; how to provide care to those suffering pain and grief in response to loss of their loved ones; and what modern issues are involved in the interment methods, such as burial or cremation, and the ritual processes, from embalming to a funeral.

However, death and life cannot be considered separately to begin with. We live until we die or life becomes meaningful only by living with death. If we view death as such, a wide range of cultural phenomena can be explored through the perspective of “death and life.” If we are to study this theme in its entirety, the capabilities of conventional Death Studies in the English-speaking world fall short. Moreover, most of death issues have been addressed within the limited contexts of Western or Christian culture. We, therefore, hope to explore a new study field of death and life based on Asian culture and using a comparative perspective. This approach has emerged



Professor Shimazono

precisely because we are Asians. While the West has led the way in Death Studies, we believe that our attempt at this base with a greater vision will pioneer a new field in the study of death and life in the world.

You have faculty members not only from the humanities and social sciences fields, but also from medical sciences, right?

Shimazono: Yes, we do. While this COE base mainly consists of members from the disciplines of philosophy, ethics, religion and Indian philosophy of the Faculty of Letters, many others come from almost every field and take active part in this program. In addition to staff from the Faculty of Medicine, we also collaborate with members of the Faculties of Education and Law, serving as an "interface" between arts and sciences. Moreover, we believe that our program plays a special and significant role in the University of Tokyo's attempts to move toward academic integration to overcome the adverse effects of specialization.

Professor Shimoda: President Komiyama maintains that Japan is "an issue-developed country." This perspective seems effective when we try to understand the scope and the aim of Death and Life Studies in international comparison. Various academic disciplines such as medicine, humanities and social sciences in present-day Japan, considerably developed as they are, are built on the ground of the diversities of Japanese cultures and social situations. New challenges or issues implicitly held in these complexities became apparent when these disciplines gather at the single issue of Death and Life Studies. This was the case that appeared in the 21st Century COE project.

The more are emerging new words and perspectives unique to Japan, the more various disciplines will come to share their academic knowledge with one another, in an effort to understand Japan's academic and cultural phenomena represented by the entwined issues of life and death. Phronesis (practical wisdom) evolves out of life experience, which seems most probably to develop and sublimate into a new idea.

With the passage of time, some of the rituals related to death have lost substance and their original power. The key to the recovery of their substance lies in the academic knowledge of each discipline that has developed independently. We intend, therefore, to tap into the latent knowledge of each discipline by inspiring one another.

You mean that the participation of various disciplines in Death and Life Studies will in turn enable Death and Life Studies to contribute to them?

Shimazono: One of the characteristics of Death and Life Studies is its focus on the field, clinical applicability and practicality or the needs of citizens or professionals working in the field. We focus on how the humanities can answer the problems that face the citizens and workers in the field, such as problems in the medical and educational fields like legal or bioethical issues. We believe that such an approach will enable the humanities to come closer to civil society and reactivate long-accumulated human wisdom for the development of society.

Development of Young Researchers in the Humanities

Where are young researchers, such as doctoral students and postdoctoral fellows who participated in and graduated from the 21st Century COE project, working now?

Shimazono: Some of the project researchers became university faculty members and one has found job at a university in the United States. The project researchers are originally the researchers who are specialized in areas other than Death and Life Studies and learned Death and Life Studies in addition to their repertoire or to expand their specialized areas from the viewpoint of Death and Life Studies. I believe that their experience in Death and Life Studies has helped broaden the scope of their research or educational activities at their job sites.



Professor Shimoda

In the humanities, we hear that support for PDs (postdoctoral fellows: young researchers who have obtained a doctoral degree) has a higher priority than support for RAs (research assistants: graduate students in a doctoral course who are provided with financial support).

Shimazono: Young researchers cannot become full-fledged researchers or educators unless they continue to deepen their research after obtaining a doctoral degree. I think this holds true throughout the world. Therefore, creating and providing a mechanism for PDs to continue and develop the research they started in their doctoral program is very important and this is part of the *raison d'être* of the COE project in the Humanities. In this sense, I believe our COE project is functioning well.

In the Global COE project, we added programs for overseas training and others designed to develop abilities to present academic achievements in foreign languages. We believe that the development of PDs is an important issue in the Global COE project and our program can set a good example in this regard. In the future, however, it will be difficult to meet every need in the development of PDs solely through the COE project. Therefore, we are now implementing various experimental attempts to identify and establish the best system for developing PDs among Japanese universities. However, even such a system will not be able to provide a job for every researcher. Young researchers need to develop themselves through hard work and friendly competition in order to obtain a good position. In this sense, we believe that the system will be able to provide an open place where they can compete with other researchers.

Aren't there quite a few PDs in this base who graduated from universities other than the University of Tokyo?

Shimazono: PDs come from various fields and universities. While they are required to focus on their field of specialization in their doctoral program, it becomes more important for them as PDs to have academic exchanges with researchers in different fields to expand the application of and further develop their research in their specialized field. In this respect, the current methods to develop young researchers are quite different from conventional ones. In Death and Life Studies, the current approach is working well. The academic exchanges among researchers with different backgrounds serve not only to inspire each researcher, but also to enhance the development of the humanities as a whole.

Four Levels of Education

Please explain in more details your plans in regard to the development of human resources.

Shimazono: Let me explain it by dividing it into four levels. The first level is the recurrent education program for adults that we have just launched. This program targets mainly healthcare professionals and those engaged in medical service and provides a three-day, two-night intensive course and are built on with each new phase on the approach of Death and Life Studies centering on Clinical Death and Life Studies to those specialized in healthcare and nursing care. Cooperation from faculty members in the Faculty of Medicine plays a key role in this program.

The second level is the education of PDs, which we have continued throughout the 21st Century COE project. We expanded this PD education program after we launched the Global COE project. As I mentioned before, it focuses on providing opportunities for overseas training and training and support for writing papers in foreign languages. By adding these new specific programs, we strive to enrich postdoctoral education.

The third level is the education of graduate students in the master's and doctoral programs. The purpose of this level is to have graduate students familiarize themselves with interdisciplinary research as we do with PDs. However, we are considering positioning Death and Life Studies at this level as a sub-major subject and then a major subject in the future. We are now making preparations now so that they can major, for example, in philosophy with sub-major in Death and Life Studies. Although doctoral students must first concentrate on their major, Death and Life Studies serves at the present stage as secondary education that supplements their major. As you can see, our focus is placed more on the education of PDs than RAs. However, we plan to make Death and Life Studies a major in the entire graduate school, starting from a master's program. At the doctoral level although the major/ sub-major system has not been firmly established in the field of the humanities in Japan, we now plan to introduce it in Death and Life Studies.

The fourth level is the education of undergraduates. We have provided education in applied ethics since 2002. Since applied ethics is closely related to Death and Life Studies, we have tried to expand it to Death and Life Studies at both the undergraduate and graduate levels. Consequently, the Uehiro Chair for Death and Life Studies was established as an endowed chair and specialists on Death and Life Studies joined the chair as a professor and a full-time instructor, who have been providing quality lectures.

What is the main difference between the 21st Century COE and the Global COE project?

Shimazono: Our participation in the 21st Century COE Program enabled us to obtain endowed chairs, which in turn enabled the faculty members of these chairs to provide education at various levels from the undergraduate to the PD level. Moreover, Clinical Death and Life Studies as a research area has been consolidated.

What is the purpose of the overseas training you mentioned as part of education for PDs?

Shimoda: That is a type of field work, whereby researchers travel overseas and learn directly from local academic activities related to the topic of death and life. By having direct contact with local people concerning Death and Life Studies, human and academic networks will be remarkably expanded. We intend to provide such opportunities not only to faculty members, but also to young researchers at the PD level so that they can build direct relationships with such specialists. While there are cases where we, faculty members, introduce overseas researchers to young researchers, there are other cases where young researchers select particular overseas researchers under whom they wish to receive training.

Shimazono: Since the Faculty of Letters encourages students to study overseas, many students of this Faculty have studied at various places throughout the world. However, such opportunities for doctoral students are very limited. If a person wishes to obtain a doctoral degree from a university, he/she must remain there at least for three to four years. Although such a system works well in most cases, those whose research themes require them to broaden their experience have to wait to do so until they have obtained their doctor's degree. Therefore, we strive to provide opportunities for overseas training to doctoral students in our Global COE project. In particular, those specialized in the study of Japan have little chance for overseas training during their graduate school days. Moreover, while it is common for students in the sciences to participate in overseas academic conferences, it is difficult for students in arts to obtain such opportunities since they are required to write a rather long application paper. What we are trying to do is to remove these obstacles and facilitate their overseas training.

We therefore accept various reasons for going overseas, such as to go to a university to take courses, to gather material at libraries and in the field and to listen to reports or discussions or make a presentation at overseas academic conferences. In short, we intend to provide as much support as possible to young researchers who wish to broaden their academic knowledge.

Shimoda: I think this is a matter of educational significance or the positioning of Death and Life



Recurrent Education Programs: Case studies by groups of health care professionals.



Recurrent Certificate Ceremony: Certificates were conferred to the participants at the last day of the education program.

Studies. All we have been talking about seems to converge to this point. A little while ago, we talked about the issue of RAs and PDs. While in the natural sciences, it is RAs who need support, it is PDs who need support in the humanities. What counts most in the humanities is to nurture people, that is, as individuals. These individuals must first assimilate the traditions of the humanities and become able to contemplate various issues on their own. Our focus on overseas training constitutes part of our efforts to develop such individuals.

It follows then that a gathering of people is not necessarily a requirement for the project implementation.

Shimoda: No, it is not. The focus is placed on the development of young people, particularly those in the humanities. This is why support for each individual is required. There is a temporal gap between the time when they submit their dissertations and the time when they become independent researchers. During the gap years, they need to sustain, apply and develop their studies. For one thing, we strive to establish this new discipline of Death and Life Studies as a means to fill this gap.

Since the ultimate goal of the humanities is to understand human beings, we have dug deep into what makes human beings ticks through our major. However, we have come to the point where we are required to review what we have done from a broader perspective. We then reviewed it from a perspective of death and life and found many important issues related to different disciplines, such as medicine and law, which have led to the restructuring of past academic work from a broader view. We consider this process as education necessary to consolidate specialized fields. In the past, there has been no place providing this type of education.



Research Meetings of Death and Life Studies: Research meetings are held periodically mainly for young researchers and graduate students.

Research Area with Wide Applicability

Is the need for people specialized in the humanities increasing in scientific fields?

Shimazono: Regarding jobs for PDs in the humanities, there are those in conventional disciplines such as philosophy, religion and sociology. On the other hand, job offerings that go beyond the boundaries of those set disciplines are increasing and expanding into the posts outside university faculty positions. For example, the demand for co-medicals, who give advice on bioethical issues in medicine or organize a care team for a patient, is increasing. Such trends suggest the possibility that people who have a doctor's degree, for example in philosophy, may be wanted for positions other than those in research or teaching.

For now, we are waiting to see how these trends will develop in the future and how large the market for experts in the humanities will become. In the field of medicine, only those people who have studied natural science, nursing and psychology have been valued. However, we think that there will be demand for knowledge in the humanities in the future. We think that such a development is inevitable in terms of the history of civilization. That is, areas, which have been approached only by natural science or have traditionally been developed by living culture, now need to be supplemented and rebuilt by humanistic and sociological knowledge. The number of such areas is actually increasing. These jobs or exploration of new knowledge are the result of a new occupational structure in relatively developed regional economies, which have been brought by the expansion of informatization and health-related services and an increase in jobs related to care that were traditionally provided by family members.

I think that scientific disciplines can be compared to companies, whereas the disciplines in the humanities, maybe also in social sciences, are like individual shops.

Shimoda: Simply put, I think that would be right, but I am not sure what Prof. Shimazono will think of that. However, I think that we have never forgotten the fact that individual shops can exist and be characterized only as tenants in a large department store, that is, the fact that these disciplines exist within larger bodies of academic knowledge.

Graduate students must conduct research to write their doctoral dissertations. While in the sciences, their dissertation themes often overlap with those of ongoing projects, this is not the case in the humanities, is it?

Shimazono: I think that it all depends on whether or not the project itself has wide applicability or whether or not it is a field/plan in which people in different fields feel it meaningful to participate. Death and Life Studies is one of the fields that fulfill these needs. It is an expansive field in which experts in literature, history, sociology, religion or philosophy wish to get involved in to further their specialized studies: it is a promising field where many researchers in different countries can expand what they have done in the past. In this sense, it is a field that has the characteristics of a "company," Prof. Yano's metaphor.

In other words, among the many applicants for research fellowships, we accept those who have or will acquire a vision to achieve further development as individual shops while having a company-like experience in our COE project.

Regarding research, how do you intend to develop the results you obtained in the 21st Century COE project?

Shimazono: In the 21st Century COE project, we actively held international research conferences. We also held research conferences organized by young researchers. These are our two proud features of the project. In the Global COE project, we focus on developing these conferences into research exchanges in Asia.

This year, we plan to hold a conference on "Death and Life Studies in East Asia" in China. We intend to promote research exchanges by inviting researchers from China, South Korea and countries in the Islamic world and sending young researchers and faculty members to these countries.

On such occasions, do you use English?

Shimazono: We used English when we had a conference in South Korea in 2007, but we use Chinese and Japanese when we have a conference in China in 2008. Since English is a non-native language for countries in Asia, use of English tends to hinder us from truly exchanging ideas. At some conferences, therefore, we translate our papers into the language of the other party in advance and have discussions through interpreters. Otherwise, at conferences in Asia, those from countries that have high English proficiency, such as Hong Kong and Singapore, tend to take the leadership of the conference. Japanese researchers specialized in Chinese studies speak Chinese well and Chinese researchers specialized in Japanese studies speak Japanese well. However, when Japanese researchers with low English proficiency who are specialized in Japanese studies try to have

exchanges with Chinese researchers specialized in Chinese studies, they use English, but it is very complicated: they speak English while combining the methods of simultaneous interpretation and advance translation. Is Japanese used in academic conferences on Buddhism?

Shimoda: No, we usually use local languages. In Asia, these conferences are conducted in local languages with use of interpreters.

It seems to take up a lot of time preparing for these actual research exchanges.

Shimoda: A process to tap into the accumulated materials in local languages is indispensable and it takes a long time to do so when only using English.



Relics: Perspectives of death and life of the East and the West were discussed at the international symposium.

This is why in the humanities considerable time and effort are required for each individual field. In Southeast Asia, there are many languages and cultures. If we try to understand the economy of Southeast Asia, we can do so in English. However, when it comes to culture or civilization, it takes enormous effort to unearth valuable materials through the media of different languages.

Shimazono: We rely heavily on experts of each language, such as Japanese researchers in Chinese studies or Chinese researchers in Japanese studies mentioned before. When we hold a conference in the Islamic world, we talk with people whose native language is Arabic via Japanese who speak Arabic fluently. Through these contacts, we strive to develop Arabians who may become specialists in Japanese culture. We need to take such a long-term perspective.



Global COE Laboratory: Young researchers in the Global COE laboratory of Death and Life Studies.

Seminars in natural science use English, which is the international standard language in science, and most of the time, other languages are not required. However, the advancement of the humanities seems to require five to 10 times as much effort as that of natural science.

Shimoda: The percentage of people who have an interest in the humanities is comparably low, to begin with. Therefore, we must develop these prospective researchers, who are limited in number, with care. However, if one competent researcher has been developed, he/she can make a significant contribution to our field. If there is one scholar who can handle a local language well and tap deep into the view of life and death of the culture, this person can help fill a cultural gap.

Shimazono: In the humanities, unless we can discuss in the language of the other party, we cannot dig deeper into essential matters. This is why we emphasize the use of local language even if it is a frustrating experience.

However, you also use English, don't you?

Shimazono: In the Islamic world and maybe in India, we often use English. However, in China and South Korea, we have a common background as users of kanji, which makes us feel awkward and leaves a sense of inadequacy if we speak English to one another. Of course, we use English, too, but it is less common to use English in these countries.

Five Years from Now

What achievements are planned for the future? What will become of the Global COE project over the next five years?

Shimazono: First of all, we plan to publish a series of Death and Life Studies from the University of Tokyo Press. The first stage of the publication will be completed in 2008, which, we expect, will show the outline of Death and Life Studies. We then intend to develop this 10-year COE project (five years in the 21st Century COE project and another five years in the Global COE project) into a longer and more sustainable research and education organization. By improving and expanding existing chairs, we will have a good foundation that is free from the framework of conventional faculties or departments. For example, in the future students in the Faculty of Medicine and that of Letters may take Death and Life Studies together.

There are two project promoters from medical sciences, right?

Shimazono: Yes, there are two among 15 promoters. As I mentioned before, Prof. Tetsuro Shimizu and Project Lecturer Hiroshi Yamazaki joined the Uehiro Chair for Death and Life Studies Chair at the Next Generation Humanities Development Center as specialists on Death and Life Studies. Prof. Shimizu's field of specialization is philosophy, based on which he has expanded his research on Death and Life Studies, particularly Clinical Death and Life Studies. He is an ideal researcher for our COE. Since he has been building a new academic field, which will eventually take shape as Death and Life Studies, from the very beginning when the outline of Death and Life Studies in Japan was still vague, he is able to understand both the traditional humanities and Death and Life Studies.

He is an active member of the Global COE project: he gives lectures and conducts seminars on Clinical Death and Life Studies and Clinical Ethics as well as serves as a commentator at workshops. In January 2008, we will conduct a three-day seminar entitled "Death and Life Studies for Medical Professionals and Care Givers," where he will be the leading figure.

Do you have anything else to add regarding the characteristics of this Global COE project?

Shimazono: The Cultural Resources Studies has been launched. Although this has been developed separately from the COE project, it is a new attempt that aims to explore how the humanities can adapt to the changing times, which is the theme that will inevitably be asked when the COE project has been completed. Cultural Resource Studies also promotes the recurrent education of adults and is engaged in the development of museum curators. This effort is significant in that the humanities is getting involved in occupational fields different from those related to research and education, which is one of the core purposes of our COE project.

Shimoda: We collaborate with Professor Akiyama's endowed research for gerontology. In the future, we plan to increase opportunities to cooperate with the various research and education organizations within the University, such as Network for Life Science Research and Science Integration Project – Humans.

Thank you very much for your time and cooperation.

(Interviewer: Masaharu Yano, COE Program Promotion Office)

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の始まりにあたって

拠点リーダー 島藺 進 (人文社会系研究科教授 宗教学)

死生学は新しい学問である。それはまず医療と人文・社会系の接点で求められている。現代の病院は死に往く人々のケアに多くの力をさかねばならないが、自然科学的アプローチによる近代医学の枠内ではその方法がわからない。1960年代から欧米ではホスピス運動が急速に広がり、死に直面した患者や家族のニーズに応えるための死生学の教育・研究が進められるようになった。

生命倫理に関わる多くの問題が噴出してきたのも同時期である。臓器移植や体外受精や遺伝子診断が可能になり、これまでとはとても克服できなかった困難を超えて、人々の欲求を充たすことができる可能性が大幅に増大しつつある。だが、医療がその力を強めていく一方で、どこで医療の介入に限界線を引くのかという難しい問題に直面するようになってきた。このため医療臨床と医学研究の現場では日常的に死生観に基づく倫理的判断が問われるようになってきている。

だが、死生学が求められているのは、医療関係の現場からだけではない。教育現場でも死生観教育（デス・エデュケーション）への要望があり、子ども達に「いのちの尊厳」について教えることを求める声がある。そもそも現代人は死に向き合うすべを見失って、途方に暮れているように見える。葬送儀礼や墓制も急速に変化しつつあり、市民はとまどっている。慰霊や追悼のあり方についても論争が生じる。死者と生者の関わりのあり方は文化によって多様だったが、そのことを強く意識する時代ともなった。また、死と生は表裏一体の関係にあり、生殖や誕生、病や老いといった人生の危機にどう向き合うかに関わる諸問題を考察するのも死生学の課題である。

死や生命の危機とどう向き合うかが死生学の取り組むべき課題のすべてであるわけでもない。死生学はそもそも生命とは何かという生命観の問題、また、人間の生と死をどのように意味づけ理解するかという根本的な人間理解の問題を避けて通るわけにはいかない。とりあえずは現代の実践的な諸問題と関連づけながら、古今東西の哲学や宗教思想を検討し、新たな思考法を探究していくことになる。生命観や進化をめぐる現代の新たな科学的知見の哲学的、思想的な意味を問い直すのも重要な課題である。環境倫理をめぐる問題、人間の生命と動物や植物の生命の関係をめぐる問題、戦争や刑罰をめぐる実践哲学的問題などもその守備範囲の一部である。

日本では早くも1904年に『死生観』という本が書かれ、ある意味では欧米諸国に先駆けて死生学研究が行われていた。西洋文化の影響を受けて、早くもこの時期に東洋人の死生観、日本人の死生観を強く意識するようになっていた。だが、今や世界各地で死生観を比較しあい、新たな状況に向き合うための模索が進んでいる。

こうした状況を踏まえ、東大の大学院人文社会系研究科（文学部）では2002年より医学部・教育学部などの他部局と協力しながら、21世紀COE「死生学の構築」プロジェクトを進めてきた。2007年から2012年春までのグローバルCOE「死生学の展開と組織化」では、これを踏まえ、新たな学問領域の確立と若手研究者の育成を目指して、さらに強力な教育・研究体制を構築していく。東京大学の「死生学」プロジェクトの第2期として重い課題を担う。



国際シンポジウム「死生と造形文化Ⅰ——「聖遺物とイメージの相関性——東西比較の試み」



死別とグリーフに向き合う——他者へのケアとセルフケア

第2期の死生学プロジェクトは、すでに21世紀COEで「構築」された基礎を踏まえて、死生学の「展開と組織化」を行うことを目標に掲げているが、東京大学における死生学の恒久的な組織化に向けて、果たすべき課題は多い。具体的には、(1) 死生の文化の比較研究、(2) 死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察、(3) 人文学の現代的実践現場への関与、という3つの課題に集約される。

このうち、(1)と(2)は従来の人文社会系研究科の教育・研究成果の蓄積の上に、ある方向性に向けて深化していくということになろう。西洋の思想や学問のイニシアティブの下に進んできた「死生」をめぐる理論的、文化的考察を非西洋のさまざまな伝統とつきあわせながら新しい地平を切り開いていくことが目指される。西洋で「死学」(Death Studies, Thanatology)とよばれてきたものを、「死生学」(Death and Life Studies)とよんでその地平を示唆している。

(3)は人文社会系研究科にとってより多くの新しい課題を含む。現代のケアの実践の場で取り組まれている問題に、積極的に関わっていかうとするからだ。死に往く者、死にゆく者を送る者、死者とともにあろうとする者、生死の危機や決断に迫られている者、こうした者をケアする者——こうした人々の問いに向き合っていく。医療や教育やケアの現場との交流が求められる。主にがん患者を対象とする緩和ケアはもっともわかりやすい例だ。とりあえずは、医療現場で働く人たちのリカレント教育に取り組む。医学部や医療関係者が力面している問題から多くを学びつつ、人文社会系の学問から提供できるものを考えていく。そのことが人文社会系の学問の新たな活性化をもたらすことも展望している。

21世紀COEの第1期からグローバルCOEの第2期に移行して、新たに求められ強調されているのは、(1)若手の教育・育成にいつその力を入れること、および(2)アジア諸地域との研究交流を深めることである。(1)社会からどのような人材が求められているかを注意深く見定めながら、若手研究者・大学院生に対して死生学に関わる学知の形成に参与していくよう促す。本来の専門的学知の深化に寄与しつつ、死生学を新たな専門的学知として形成していく、あるいはその可能性を探る。また、研究成果の外国語での発信力を高めるための支援を行う。(2)中国や韓国では確かに死生学への関心が高まりつつある。もちろんこれまで行ってきた欧米諸国との交流もいっそう拡充していく。イスラーム圏等、アジア諸地域の状況も見渡しながら、グローバルな死生学の発展に貢献することを目指す。

5年間で将来の死生学の青写真を具体化にせせると考えるほど楽観的ではない。新たな領域の学問の形成と充実には長い時間がかかり、多くの人々の努力の積み重ねが必要だ。だが、長期にわたる発展のためのおおよその見取り図は、この期間に形を現すよう努める。及ばずながら、世界的にも新たな研究交流のあり方と学問分野の形成を促す試みとなることを願っている。また、グローバルな市民社会の新たな活力の小さな源泉の一つとなることをも希望している。



死生学と人文学

下田 正弘 (人文社会系研究科教授 インド哲学仏教学)

問いの受け渡しという作業は、どこか生命が誕生する過程に似ている。世代間であれ、異性間であれ、生命の誕生は他者の存在と、他者との共同作業を必要とし、しかも出現した生命は、作業にたずさわったものたちの、いずれでもあり、いずれでもないような、あらたななにかとなっている。問いを受け渡す場合も、発信者と受信者があり、問いがうまく共有され、持続的に追及されたとき、両者のあいだには、これまでなかった、あらたななにかが生まれ出している。

問いを提起して共同作業をはじめようとするときに必要なのは、問いの対象の輪郭をあらかじめ明確にして相手に手渡すのではなく、受け手のほうにその輪郭を彫りだす力が芽生えるよう配慮することであろう。問いは単独に存在するのではなく、問う主体とのかかわりにおいてある。

問いの対象は、探求の進展とともにすがたを変えることもまれではなく、それでも問いとして成立しつづけるのだとすれば、問いの一貫性は、問いの対象の不変性に依存するのではなく、むしろ問い手が問いつづける姿勢の持続性によっている。問いの対象が、たとえ当初は瞭然としてはいなくとも、あるいは時とともに変容していても、問いを希求する強い力が問い手の内部に存しつづけるなら、未知の対象は、問い手の姿勢におうじて、やがてしかるべき相貌を決定し、画然としたひとつのすがたをもってあらわれてくる。

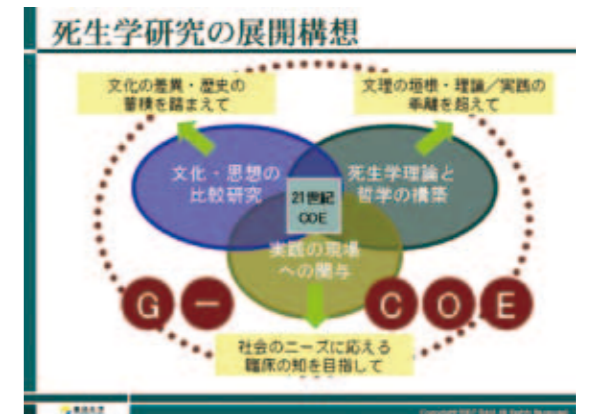
人文学の分野に出現した死生学は、人文学にとっては未聞の問いであり、いまだに輪郭の未詳な対象であろう。死生学を明かすことは、死生学を生み出すことにはかならず、そのためには、死生学を問いとす力が、人文諸学の内部において、可能ならばそのできるかぎり内奥において芽生え、成長し、はたらかなければならない。

ここで必要なのは、死生学がみずからの輪郭をあらかじめ確定して人文学に授けることではなく、人文学から問いの対象とされつづけ、希求しつづけられる存在となるよう、みずからの独自性を、人文諸学との関係において模索することである。こたえがあらかじめ隠しおかれた擬似的な問いではなく、秘められたものが未知なる真正の問いが成り立つのは、あくまで問い手とのあいだにおいてであり、死生学が掛け値のない問いであるとするなら、その輪郭の完成には、問い手である人文諸学の存在が必要となる。

死生学は人文学の内部から要請されて誕生したものでは、かならずしもない。それはむしろ医療や看護や福祉にかかわる喫緊の諸問題、さらには科学技術や社会の変容による死生をめぐる環境の急激な変化によって、およそ異なる場で生まれた問いが、外から人文諸学へと与えられた面がおおきい。死生学の重要な役割のひとつは、この問いの与え手と受け手とのあいだを橋渡しするところにある。

伝統的な人文学は外に発生している諸問題に精通してはいない。死生学は外部のものたちにおいて芽生えたこの問いを繊細に受けとったうえで、人文諸学の内部にその問いが芽生えるよう、注意しながらその問いを培養しなければならない。人文学のかわは、いまだ聞いたことのない現場からの依頼にたいして、さし出された小さなイメージの胚をみずからの内部で育て、やがて明瞭なあたらしい概念を生み出してゆかねばならない。

死生に関心をしめさない人文学はおよそありえず、人文諸学のそれぞれの内部には、やがて死生学として成長、誕生するものへの問いがすでに胚胎されている。死生学が、この胎へと外部の問いの核をたいせつに移植しうするなら、死生学は人文学からの死生学として暖められ、孵化させられるだろうし、人文学は、みずからの内部からあらたな生命を生み出す力を確信し、より強い存在へと変じてゆくだろう。



死生学研究成果を社会に還元する—リカレント教育に向けて

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床倫理学）

私たちは皆、自分たちが死に向かって生きているということを知っている。私たちの多くは、死を今日、明日のことではないと思っているが、しかしいつかは必ずそこに至ると知っている。まだまだ先のことだと思っている時には、このことは心の奥に隠されていて、いつも意識しているわけではないが、何かきっかけとなって、自らの死が、あるいは親しい者の死が、目の前に立ち現れると、哀しみを伴いつつ、この事実を意識することとなる。そうであればこそ、死を、ないしは死に向かって生きているという自らのあり方を、自らの中でどう位置づけるかということは、全ての人にとって（少なくとも潜在的には）大きな関心事となっている。そして、他ならぬこのことが、諸学問分野に対して横断的な〈死生学〉という領域を成り立たせている社会的な基盤なのである。

そうであれば、死生学という学問領域は、そのそもそもの成り立ちからして、全ての人この関心事に対して何らかの応答をするという役割を負わされて、否、むしろ自ら引き受けていることになる。例えば、「日本人の死生観」といったテーマに関係する個別研究は、これまで思想史、文学、文化史、あるいは社会心理学や社会学といった既成の学問分野のなかでなされてきたであろう。が、それを〈死生学〉という領域の下に置き直して見ると、全ての人あの関心事に応えようとする学問的な営みを支える基礎研究というカテゴリーに属する個別研究として、位置づけをされ直すことになるであろう。

では、人文・社会系の諸分野でなされてきた死生観等に関する諸研究を死生学の基礎研究とし、それらに支えられて、死生学は、全ての人死という関心事にどう対応しようとするかという、〈教育〉が重要な窓口となる。すでに「死の準備教育／デス・エデュケーション」というような名で一般の学生、市民を対象とした教育が提唱されてきているが、これを体系的にしっかりしたものに整え、初等教育から大学・大学院、さらには生涯教育の中で活かされるようにするということも、すべきことのひとつである。今、私がG-COEの中で担当することとなったリカレント教育もまた、重要な窓口である。

私たちが企画しているリカレント教育は、さしあたって医療や介護の現場で働いているような、ケアの専門家を主たる対象とする。ケアの専門家たち（医師、看護師、ソーシャル・ワーカー、ケア・マネージャー等々）は、死にまさしく直面している、あるいは自らが生きているということと死を見比べつつあるような重篤な患者とその家族や、高齢のため心身がだんだん弱ってきて、人は皆死に向って生きているのだということが現実のこととなってきている介護利用者とその家族と向き合い、あるいはこうした人たちに寄り添いながら、ケアに従事している。死、ないし死に向かう最後の生をどう理解し、よりよい日々を過ごし得るようにどう支援したらよいかと考え、ここで活かせる専門的知識を求めている。これに応える活動が、これから本格的に展開しようとしているリカレント教育に他ならない。



活動の手始めとして、2008年1月12日～14日に、冬季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》を開催したが、50名定員のところ100名を越える応募があり、北海道や北陸など遠くから、また医療機関で重責を担っている方々も含めて、参加していただいた。人文・社会系の研究成果を提示する「死生学コア／トピック」と、臨床現場にかかわる場面で考える「臨床死生学コア／トピック」から成るカリキュラムを立てたが、受講者には好評で、熱心に参加していただいた。そこで、来年度は、2日間の入門コース、さらに学びたい方のための1日コース、および個別事例検討のスキルアップのための研修会を企画している。

ここでなにより問題なのは、医療・介護の現場からの切なる求めに応え得る、どのような〈知〉を私たちは提供できるのかということである。人文・社会系の諸分野に由来する基礎研究の集積はあるとして、それを死に直面する臨床現場に臨んでいる人に対して意味のある〈知〉の体系（あるいは、少なくとも何らかの〈塊〉）として整える作業が、死生学の中でなされる必要がある。〈臨床死生学〉という名は（その名の成立の由来がどうであれ）、そのような学問活動にこそ相応しい。リカレント教育を企画することは、同時に〈臨床死生学〉という研究活動でもある。

